

## 常陸における古墳時代中期末・後期の石棺出土人骨

|          |   |
|----------|---|
| 著者       | Blaj Hribar Petra   |
| 雑誌名      | 筑波大学先史学・考古学研究   |
| 号        | 25  |
| ページ      | 37-46   |
| 発行年      | 2014-03   |
| その他のタイトル | Some Notes on the late Middle and Late Kofun Period Skeletal Remains from Stone Coffins in Hitachi Region |
| URL      | <a href="http://hdl.handle.net/2241/00149867">http://hdl.handle.net/2241/00149867</a>                     |

研究ノート

## 常陸における古墳時代中期末・後期の石棺出土人骨

ブライ・フリバル・ペトラ

日本列島は酸性土壌を基本としているため骨が遺存しにくい。埋葬遺跡から出土する人骨は副葬品とならんで考古学的に最も有用な遺物である。被葬者と副葬された遺物からは当時の親族構造や社会構造、生活様式や死生観などの様々な情報を得ることができる。

常陸では石棺出土人骨が多く知られてお

り、保存状況が良いものが少なくない。しかし、人骨が遺存していても詳細な報告は少なく、性別や年齢が判明している事例は非常に少ない。そこで、本稿では常陸における古墳時代中期末～後期の石棺出土人骨を集成し、その基本的な情報についての整理を行った。

### I. はじめに

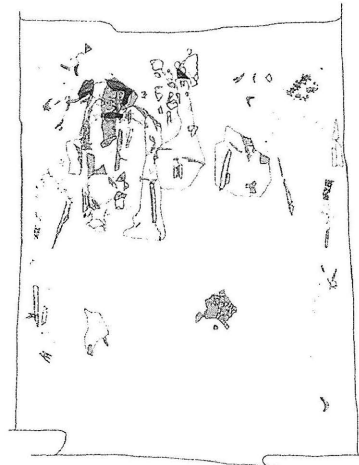
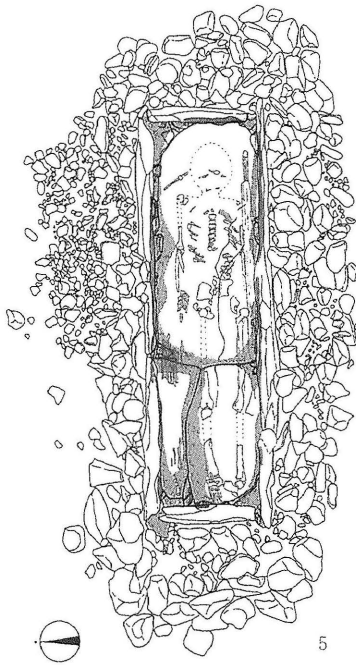
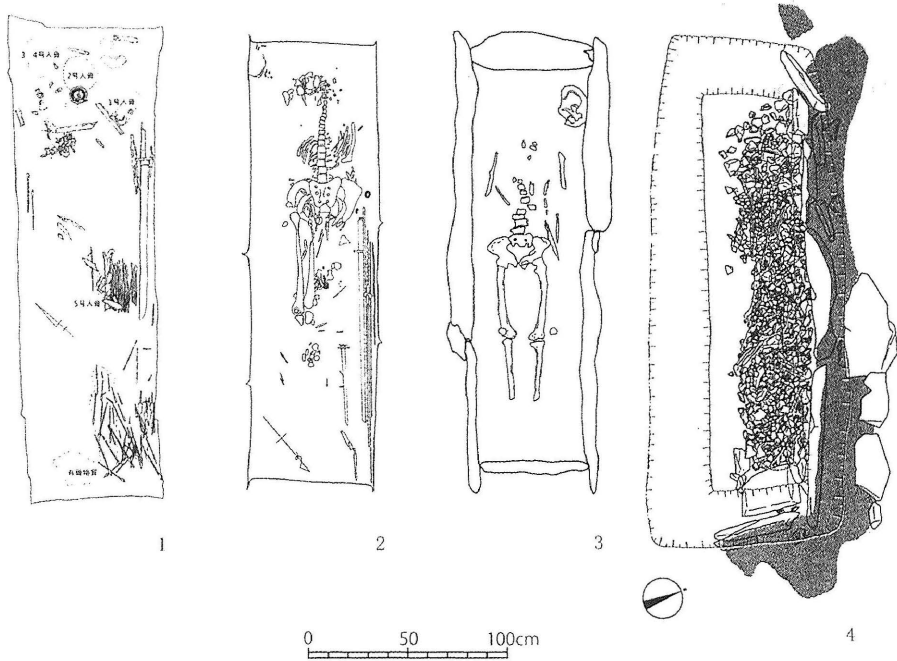
日本列島は酸性土壌のため、骨が遺存しにくい。さらに、時代によって遺存する人骨の量が大きく異なる場合がある。例えば、弥生時代と奈良時代から室町時代までの人骨の遺存例は少ないと言われている（清家 2010：10 頁）。奈良時代以降の場合は、土壌の問題だけでなく火葬の広がりがある原因の一つとして考えられている。また、古墳時代に木棺が用いられた場合、人骨は遺存しにくい。石を棺材に利用した埋葬施設では人骨が比較的遺存しやすい。例えば、古墳時代の常陸では石棺からの出土人骨数が多く、保存状況も良いと言える。しかしながら、人骨が遺存していても、性別が判定している例は非常に少ない。とはいえ、埋葬遺跡における人骨は副葬品と並んで考古学的に最も有用な遺物であり、そこからは当時の社会構造や生活様式、死生観などの様々な情報を得ることができると考えられる。

常陸における石棺出土人骨の研究は、個別事例の分析をのぞけば、今日までほとんど行われていないと言ってもよい。石棺そのものについては、石橋充が片岩の板石を使用した埋葬施設の形式分類を行い、その編年、分布、埋葬施設全体の階層的関係を検討し、常陸地域の性格に言及している。とくに階層の問題に関しては、首長層は大型前方後円墳（6世紀末以前）及び大型方墳・円墳に埋葬され、墳頂部・地上部に埋葬施設を有したと考えている（石橋 1995：42 頁）。また、常陸地域の群集墳について取り上げた黒沢彰哉は、墳丘中心部に埋葬施設（石棺または横穴式石室）をもたない古墳が古墳時代後期の中で大きな歴史的意義を有しているとし、それらを「特異埋葬施設古墳」と命名した上で分析を行っている（黒沢 1993：95 頁）。黒沢は、墳丘の中心部に埋葬施設をもたない古墳が茨城県や千葉県、栃木県、福島県に分布し、その被葬者は大型古墳の被葬者より下位の階層に位置付けられるとしている（黒沢 1993：152 頁）。

以上をふまえ、本稿では常陸における古墳時代中期末～後期の石棺出土人骨を集成し、その基本的な情報についての整理を行うこととする。なお、ここで取り上げる資料は、現在の茨城

第1表 古墳時代中期末～後期における人骨出土埋葬施設一覧

| 所在地     | 古墳名       | 墳形  | 規模    | 人骨  | 遺物  | 時期       |
|---------|-----------|-----|-------|---|---|----------|
| 1 東海村   | 中道前5号(翠山) | 方円  | 約52   | 1体・♂(壮年) 顔骨(主体)   | 円筒埴輪等、直刀1、刀子1、鉄錐(矢頭)、鉄斧1、鏃、土師器、須恵器  | 5c末～6c初頭 |
| 2 東海村   | 中道前6号     | 不明  | 不明    | 4体・♀(壮年中頃～熟年齢半)♂(壮年) 児(10歳前後)、成人(性別不明)                    | 円筒埴輪等、直刀3(大1・小2)、女性・碧玉製簪玉7(腰部)、貝珠1(頭蓋骨付近)、番釘製白玉1、ガラス小玉84  | -        |
| 3 東海村   | 舟塚        | 方円  | 88    | 1体  | 玉類、銅製非頭把頭1、鹿角管把頭2、金銅製鞍金具1式、挂甲小札、鉄錐20以上(石棺内)、埴輪(墳丘)  | 6c中葉     |
| 4 筑西市   | 上野        | 不明  | 不明    | 人骨  | 鈴鹿1、鈴鹿1、短甲1、龜甲2、直刀2、刀子1、鉄剣1、鉄錐4、鉄斧1、馬鐙3、香炉3、釧1、鏡板1、鍔1、玉類  | 5c末～6c初頭 |
| 5 関成町   | 恵行寺       | 円?  | 20?   | 7体・♂(壮年後半～左)♂(壮年～右)♂(壮年～右)♂(壮年)♀(壮年)♀(壮年～左)♀(壮年～右)、幼児(3歳) | 直刀、短刀、刀子、釣針、鉄錐2、玉類、砥石(磨上)、埴輪(周溝)  | 6c後半     |
| 6 八千代町  | 大田        | 不明  | 不明    | 5体♂(熟～壮年期後半)♂(壮年期後半)♀(壮年期)♀(壮年期前半)児(7～11)                 | 銅鏡1、直刀2、刀子3、鉄錐105、金環4、埴輪(表土他)   | 6c後半     |
| 7 八千代町  | 栗山矢尻      | 円   | 24    | 2体  | 不明  | -        |
| 8 境町    | 桜山        | 不明  | 2体    | 2体  | 玉類、貝殻、直刀1(出土)   | -        |
| 9 坂東市   | 高山        | 不明  | 不明    | 人骨  | 直刀4以上、刀子3、鉄錐2、馬具、玉類、金環2   | -        |
| 10 石岡市  | 西園大塚      | 円   | 26    | 4体  | 無   | -        |
| 11 石岡市  | 舟塚山9号     | 方   | 10    | 2体  | 無   | -        |
| 12 石岡市  | 舟塚山12号    | 円   | 19    | 2体  | 玉類(棺内)  | -        |
| 13 石岡市  | 舟塚山13号    | 円   | ?     | 人骨  | 石製埴輪品(棺外)   | 5c中葉     |
| 14 つくば市 | 甲山1号石棺    | 方円? | 30    | 1体・♂・熟年   | 直刀2、埴輪(周溝)  | 6c前半     |
| 15 つくば市 | 甲山2号石棺    | 方円? | 30    | 3体・♂(熟年)♀(壮年)+幼児  | 直刀2、鉄錐約120、鹿角製刀子、玉類、骨製鞍金具6  | 6c前半     |
| 16 つくば市 | 小田        | 円?  | 約20?  | 2体(改葬・棺内)   | 直刀2、鉄錐11  | -        |
| 17 つくば市 | 期の台9号     | 楕円  | 33×25 | 3体  | 直刀、金環、玉類、漆器   | -        |
| 18 つくば市 | 羽成7号墳     | 不明  | 不明    | 2体(改葬)  | 須恵器(葬送)   | 7c中葉     |
| 19 土浦市  | 常名金出土石棺   | 不明  | 不明    | 3体  | 鉄錐約2  | -        |
| 20 土浦市  | 東台10号     | 方円  | 32.5  | 人骨  | ガラス小玉、鉄片  | -        |
| 21 土浦市  | 東台13号     | 橢圓  | 28    | 人骨  | 直刀5、短刀1、刀子2、鉄錐46以上、玉類   | 7c後半     |
| 22 土浦市  | 芳行地       | 円?  | 約15   | 1体  | 金環1、須恵器(器内被覆器・周溝)   | 7c中葉     |
| 23 土浦市  | 石倉山5号     | 橢圓  | 15.6  | 人骨  | 須恵器片(棺内、周溝)   | -        |
| 24 土浦市  | 武者塚       | 円   | 23    | 6体(玄室)♂・♂(成年)3体?(成年)+児                                    | 鉄錐42(前室)、玉類、漆、葦片、頭髪(角髪金含む)、銅製帶狀金具1、鉄製櫛付背鍔破片1、三頭環頭大刀1、五頭大刀1、直刀3                                    | 7c後半     |
| 25 蔵ヶ浦市 | 富士見塚1号    | 方円  | 80、2  | 2体(以上)・♀♂・壮年  | ガラス玉17、管笠4、鉄錐30、直刀1、馬具、須恵器4、埴輪(周溝)  | 5c末～6c初頭 |
| 26 蔵ヶ浦市 | 富士見塚3号    | 円   | 17×1  | 1体・♀・熟年期前半  | ガラス小玉91(現存69)、鉄製刀子2、埴輪(周溝)  | 6c後半     |
| 27 蔵ヶ浦市 | 大塚5号      | 橢圓  | 23.8  | 1体  | 直刀1、刀子1、管錐16、埴輪(周溝)   | 6c中葉～後半  |
| 28 蔵ヶ浦市 | 大塚8号      | 方円  | 27.8  | 人骨  | 無   | -        |
| 29 蔵ヶ浦市 | 大塚10号南石棺  | 方円  | 25.2  | 人骨(竈内)  | 須恵器破片、土師器1(周溝)  | -        |
| 30 蔵ヶ浦市 | 大塚11号     | 円?  | 12.6  | 1体  | 無   | -        |
| 31 蔵ヶ浦市 | 大塚12号     | 橢圓  | 20    | 骨片  | 刀子1(棺内)   | -        |
| 32 蔵ヶ浦市 | 大塚13号     | 円   | 10    | 1体  | 鉄錐17、刀子3  | -        |
| 33 蔵ヶ浦市 | 松尾2号      | 方円  | 35    | 3体  | 直刀3、鉄錐4、刀子1(棺内)、埴輪(周溝)  | -        |
| 34 蔵ヶ浦市 | 熊久保2号     | 不明  | 不明    | 9体  | 勾玉1、須恵器(周溝)   | 7c中葉     |
| 35 真浦村  | 庚申        | 方円? | 不明    | 人骨  | 金環2、銅環4、玉類  | -        |
| 36 輪敷市  | 水神塚       | 不明  | 不明    | 1体  | 鉄錐29、刀子1、直刀1(棺内)、馬具(棺外)、土師器1  | 6c前半～中葉  |
| 37 鉢田町  | 塔宮奈       | 不明  | 不明    | 2体  | 金環2、銀環2、鉄錐約20、直刀2   | -        |
| 38 鉢田町  | 梶山        | 円   | 46    | 5体  | 直刀10、(鈴鹿環頭・内頭3・圭頭を含む)、刀子1、玉類、金環3、須恵器(周溝他)   | 6c末～7c初頭 |
| 39 行方市  | 豊塚        | 不明  | 不明    | 人骨  | 無   | -        |
| 40 行方市  | 三輪塚       | 方円  | 85    | 1体♂・老年  | 金銅製冠、金銅製肩袖付耳飾2、玉類、貝剣、鏡2、直刀2、剣1、破1、直刀1、刀子1、鉄錐160以上、短甲1、挂甲1、掛角付骨1、鉄斧1、鏡板1、面飾り金具1、砥石1(木棺内)、埴輪(墳丘)    | 5c末      |
| 41 潮来市  | 大生西1号     | 方円  | 71.5  | 2体・♂・熟年(40～50歳)・關節炎(arthritis deformans)?                 | 鉄錐8(棺内)、鉄錐2(棺外)、鉄製刀装具6、大刀8、銀環・金環・銅環5、玉類、馬具(棺外)、直刀1、刀子3、鉄製刀装具、鉄錐、須恵器、金環1、銀環2、銅環1、玉類、土師器、埴輪(造出し・周溝) | 6c末～7c初頭 |
| 42 潮来市  | 大生西14号    | 円   | 12.5  | 2体(棺内外)♂(成年)♀(成年)(同時に合葬)                                  | 刀子4、大刀1、玉類(棺内)、須恵器、土師器、須恵器、埴輪(造出し・周溝)   | -        |
| 43 潮来市  | 観音寺山3号    | 円   | 不明    | 遺1  | 刀子、鉄錐、須恵器   | -        |
| 44 鹿嶋市  | 宮中野84～7号  | 円   | 18    | 3体  | 直刀3、刀子3、鉄錐11、玉類   | -        |



1. 太田古墳 (♂+♂+♀+♀+児)
2. 大生西1号墳 (♂+?)
3. 富士見塚3号墳 (♀)
4. 中道前6号墳 (♀+♂+児+?)
5. 中道前5号墳/茅山古墳 (♂)
6. 武者塚古墳 (♂+♂+児+?+?+?)

第1図 石棺出土人骨の事例

県にあたる常陸国の範囲と一部鬼怒川以西の地域（下総国の一部）から出土した資料であり、その対象には石棺との系譜関係を有する石棺系石室も含めることとする。

## II. 性別と年齢

第1表に明らかなように、常陸の石棺出土人骨は、その事例数の多さにもかかわらず、性別や年齢が不明であるものが非常に多い。それは、資料の多くが1950～1970年代の調査に伴うもので、当時の調査担当者が出土人骨に特段の関心を払わなかったためと考えられる。

### 1. 概要

本稿で扱う資料は、古墳時代中期末から後期（5世紀末～7世紀中葉）における石棺出土人骨である。その古墳数は42基であり、石棺数（石棺系石室を含む）は44基、個体数は97体以上である。なお、人骨の個体数については、不十分な報告が多いため正確には把握できないが、「人骨」（12例）とだけ報告されている場合には1体として、2体以上（1例）と報告されている場合には2体として数えると、97体以上（97体+ $\alpha$ ）となる。そこで、以下の分析ではひとまず97体を基本にして整理を進めていくこととする。それらの97体のうちで性別が鑑定されているのは25体（25.8%）で、5体（5.2%）は小児である。また、性別の内訳については、女性が10例（40%）、男性が15例（60%）である。

今回集成した古墳は前方後円墳及び円墳であり、その多くは小規模古墳である。最も規模の大きい古墳は舟塚古墳（男性？：前方後円墳・88m）で、次いで三味塚古墳（男性？：前方後円墳・85m）、富士見塚1号墳（女性+男性：前方後円墳・80.2m）、大生西1号墳（男性+？：前方後円墳・71.5m）、茅山5号墳（男性：前方後円墳・52m）、梶山古墳（5体：円墳・40m）がつづく。しかし、その他はいずれも40m以下の墳丘規模である。

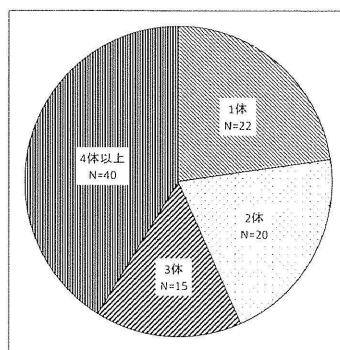
第2表 埋葬個体数ごとの事例数と時期

| 埋葬個体数 | 例数  | 時期       |
|-------|-----|----------|
| 1体    | 22例 | 5c末～7c中葉 |
| 2体    | 10例 | 5c末～7c中葉 |
| 3体    | 5例  | 6c末～7c初頭 |
| 4体    | 2例  | -        |
| 5体    | 2例  | 6c末～7c初頭 |
| 6体    | 1例  | 7c後半     |
| 7体    | 1例  | 6c末      |
| 9体    | 1例  | 7c中葉     |

### 2. 埋葬個体数と性別

埋葬個体数として多く認められるのは、1体及び2体の埋葬である。1体埋葬は22例、2体埋葬は10例、3体埋葬は5例、4体以上埋葬は7例が確認できる（第2表、第2図）。

2体埋葬のうち、2例は女性+男性の埋葬であり、男性+男性、女性+女性、女性+子供、男性+子供という組み合わせは確認できない。3体以上の埋葬では、4例が女性+男性の埋葬であり、



第2図 埋葬個体数ごとの人骨数

第3表：複数体埋葬と被葬者の性別

| 性別    | 2体 | 3体以上 |
|-------|----|------|
| 女性+男性 | 2例 | 4例   |
| 女性+女性 | —  | 2例   |
| 男性+男性 | —  | 3例   |
| 女性+子供 | —  | 4例   |
| 男性+子供 | —  | 5例   |

第4表：出土人骨の性別と年齢

| 性別 | 成年 | 壮年 | 熟年 | 老年 |
|----|----|----|----|----|
| 女性 | 1例 | 6例 | 3例 | —  |
| 男性 | 3例 | 8例 | 3例 | 1例 |

男性+男性が3例、女性+女性が2例、女性+子供が4例、男性+子供の埋葬が5例確認できる（第3表）。ただし、限られた情報であるため、ここから確かな傾向を読みとることは難しい。

埋葬個体数の時期的傾向については、1体埋葬及び2体埋葬の方が時期的に早く、5世紀末から7世紀中葉まで認められ、3体以上の埋葬は6世紀末以降に出現して7世紀中葉まで行われていたようである。

### 3. 性別と年齢

被葬者の年齢に関しては、性別が判別できるものについては年齢も明らかにされており、性別が不明のものも1体のみ年齢推定がなされている。小児は3体の年齢が判明しており（3歳、7～11歳、10歳）、2体の年齢が不明である。女性は5体が壮年、残りは1体ずつが壮年前半、壮年中頃～熟年前半、熟年前半、熟年及び成年とされている。男性に関しては、6体が壮年、2体が壮年後半、3体が成年、残りは1体ずつが壮年後半～熟、熟年（40～50歳）、熟年及び老年とされている（第4表）。

性別については、25体の性別しか判明しておらず、女性10体及び男性15体である。しかしながら、被葬者の性別については、副葬品によってそれを明らかにしようとする研究が認められる。そこで次節では、被葬者の性別と副葬品の関係について、従来の研究を振り返りつつ、常陸の状況を整理しておきたい。

## Ⅲ. 性別と副葬品

### 1. 性別推定が可能な副葬品

かつて森浩一と柳沢一男は、鍬が女性とともに副葬されていない可能性が高いと指摘した（森1965、柳沢1989）。しかしながら、両者の研究では扱った人骨資料の数が少なかった。川西宏幸と辻村純代は80例の人骨出土埋葬施設を集成し、鍬は女性に副葬される例が少なく、また、甲冑と矛は女性に伴わない可能性が相当高いことを明らかにした（川西・辻村1991）。確実に女性に鍬が伴う事例は2例だけであり、鍬を伴う確認例の96%は男性という指摘もなされている（清家2010：67頁）。この点については、北部九州と山口県の出土資料を中心に検討した轟次雄の研究がある（轟1999）。轟は、鉄鍬と刀子が同一の埋葬施設から出土する事例が少ないため、鉄鍬は男性被葬者、刀子は女性被葬者に伴うものと考えている。しかしながら、全国的に見た場合、鉄鍬と刀子が同一の埋葬施設から出土する例は多い。そのため、刀子が女性、

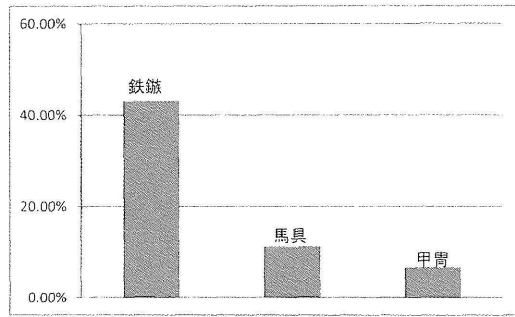
鉄鏃が男性に伴う副葬品であるとは断言できないであろう。

今尾文昭と森浩一は、腕輪形石製品が腕部に配置されている場合、被葬者が女性である可能性があると指摘した（今尾 1991：森 1991a・b）。腕部に配置された可能性のある腕輪形石製品出土例は、全国で 18 基が存在する。ただし、18 基のうちで人骨が遺存し、性別も判明している事例は 5 基しか認められない。

甲冑については、ほぼ男性のみに伴う副葬品であると言える。検討を要する事例としては、女性人骨が出土した福岡県老司古墳 3 号石室があげられるが、その出土状況から甲冑は他の埋葬者（人骨なし）に伴う副葬品であると報告されている（山口・吉留・渡辺 1989）。

馬具の多くは後期の古墳から出土することが知られている。この副葬品は複数埋葬に伴って見つかることが多いため、馬具と被葬者の性別とがどのような関係にあったのかを指摘することは困難である。一方、鉄鏃と甲冑が馬具とともに出土する例が多いことを勘案すると、これらの副葬品は何らかのセット関係にあったと言えるかもしれない。

以上のように、特定の副葬品からは被葬者の性別を判別できる可能性がある。そこで、そうした視点から今回の資料について見てみると、当然ながら前期古墳を対象としていないため腕輪形石製品の腕部配置例は存在せず、女性である可能性が高いことを示す副葬品は認められない。一方、男性に伴う副葬品とみられる鉄鏃、甲冑及び馬具については、鉄鏃が 19 基、甲冑が 3 基、馬具が 5 基に認められる（第 3 図）。また、甲冑と馬具はすべて鉄鏃とともに副葬されている。この鉄鏃を出土した 19 基の中で、男性人骨が検出されている例が 8 例（男性人骨 14 体）



第 3 図 鉄鏃・馬具・甲冑が副葬された石棺の割合

あり、それらのうち男性の 1 体埋葬例は 2 例である。残りの事例は複数埋葬である（2 体埋葬 2 例・男性人骨 3 体、3 体埋葬 1 例・男性人骨 1 体、5 体埋葬 1 例・男性人骨 2 体、6 体埋葬 1 例・男性人骨 2 体、及び 7 体埋葬 1 例・男性人骨 4 体）。

## 2. 刀子の問題

轟次雄は、刀子が鉄鏃とともに出土しないため、刀子は女性のみに伴うと考えている（轟 1991）。しかし、清家章が指摘するように、刀子は男性のみに副葬されている例も多く報告されている。清家は「轟は北部九州と山口県の資料を中心に検討を加えているが、そうした地域に限定しても男性人骨だけが検出される埋葬施設から刀子が出土する例は 17 例も存在し、決して少なくないのである」と述べている（清家 2010：69 頁）。鉄鏃と刀子がともに出土しない理由は性別によるものとは限らない。おそらくその理由は、小規模な墳丘及び無墳丘墓から出土した資料が中心となっているためであろう。すなわち、階層が低かったと思われる集団墓で

は、同一埋葬施設から2種類以上の副葬品が出土することが非常に少ない。したがって、階層が低い集団墓で刀子と鉄鏃がともに副葬されていなかったのは、性別による差ではなく、階層的な違いを示していると考えられる。清家は「むしろ男性人骨と共に出土する例が多い」と述べている（清家 2010：69 頁）。

今回の資料を検討した結果、40 点の刀子が 19 基の埋葬施設から出土している。そのうち、男性の 1 体埋葬に伴う事例は 2 例、男性の可能性が高い 1 体埋葬に伴う事例は 3 例である。また、女性の 1 体埋葬に伴う事例は 1 例で、それ以外は多数埋葬施例に副葬されている。したがって、事例数は少ないながらも、今回の資料においても刀子は性別によって限定される副葬品ではなかったと言えそうである。轟は鉄鏃と刀子はともに出土しないと述べているが、今回の資料のうちで、刀子と鉄鏃の共伴例は 11 件も確認することができる。

#### IV. おわりに

本稿では、常陸における古墳時代中期末～後期の石棺出土人骨を集成し、その基本的な情報について整理してきた。しかしながら、人骨に関する情報が不十分であるため、詳細な分析を進めるには至らなかった。本稿で取り上げた被葬者の性別と副葬品の関係についても不明な点が多く、それも人骨についての十分な情報を欠いていることに大きな原因がある。

これまでの古墳出土人骨に関する研究では、古墳時代前期～中期の資料を主な対象として、副葬品と被葬者の性別などを検討する作業が進められてきた。今後は、古墳時代後期の資料を合わせて検討を進め、副葬品だけではなく古墳の規模や階層性との関係を明らかにし、さらには男女の地位の差を検討していく必要があると考えているが、その際、今回取り上げた常陸の石棺出土人骨は貴重な資料となり得る可能性がある。そのためにも、常陸の石棺出土人骨については、可能な範囲で DNA 分析などの科学的な分析方法を適用し、その性別や年齢、親族関係などを判別していくことが望まれる。また、そうした方法の適用以前に、現在の研究水準にもとづいた形質人類学的鑑定をあらためて進めることが必要であろう。



参考文献

- 今尾文昭 1991 「遺物の配列組成1配列の意味」『古墳時代の研究3 古墳II 副葬品』雄山閣 229-245頁。
- 石橋 充 1995 「常総地域における片岩使用の埋葬施設について」『筑波大学・考古学研究』第6号  
31-57頁。
- 川西宏幸・辻村純代 1991 「古墳時代の巫女」『博古研究』第2号 博古研究会 1-26頁。
- 黒沢彰哉 1993 「常総地域における群集墳の一考察-茨城県新治郡千代田町大塚古墳群の分析から-」『婆良岐考古』第15号 婆良岐考古同人会 95-158頁。
- 清家 章 1996 「副葬品と被葬者の性別」福永伸哉・杉井健編『雪野山古墳の研究 考察篇』雪野山古墳発掘調査団 175-200頁。
- 清家 章 2010 『古墳時代の埋葬原理と親族構造』大阪大学出版会。
- 辻村純代 1983 「東中国地方における箱式石棺の同棺複数埋葬」『季刊人類学』14巻2号 京都大学人類学研究所 52-83頁。
- 辻村純代 1988 「古墳時代の親族構造について-九州における父系制問題に関連して-」『考古学研究』第35号巻第1号 考古学研究会 89-108頁。
- 森 次雄 1991 「刀子と鉄鍬の副葬関係-山口・北部九州地域の動向-」『地域相研究』第20号 上巻 地域相研究会 99-148頁。
- 森 浩一 1965 『古墳の発掘』中公新書。
- 森 浩一 1991a 「黄金塚古墳と女性の被葬者①」『古代学研究』第24号 古代学研究会。
- 森 浩一 1991b 「黄金塚古墳と女性の被葬者②」『古代学研究』第25号 古代学研究会。
- 柳沢一男 1989 「九州地方」『季刊考古学』第28号 雄山閣 75-78頁。
- 山口譲治・吉留秀敏・渡辺芳郎編 1989 『老司古墳』福岡県埋蔵文化財調査報告第209集 福岡県教育委員会。

遺跡参考文献 \*番号は第1表の番号に対応。

- 1・2. 茨城大学人文学部考古学研究室編 2006 『常陸茅山古墳』東海村教育委員会。
3. 茨城県立美術館 1971 『茨城県玉里村舟塚古墳-発掘調査のあらまし-』舟塚古墳調査団。
4. 茂木雅博編 1988 『関城町史 別編資料編-関城町の遺跡』関城町。
5. 関城町教育委員会・関城町史編さん委員会 1986 『関城町専行寺古墳発掘調査報告書』。
6. 太田古墳調査団 1989 『太田古墳』八千代町教育委員会。
7. 八千代町教育委員会 1976 『栗山矢尻古墳発掘調査報告書』。
8. 鹿島町木滝台遺跡発掘調査会・日本文化財研究所 1978 『木滝台遺跡 桜山古墳埋蔵文化財発掘調査報告書』。
9. 岩井史編さん委員会 1992 『岩井史の遺跡 駒寄遺跡 高山古墳 香取塚古墳半谷古墳 稲荷塚古墳』。
10. 茂木雅博 1966 「箱形石棺の編年に関する一試論-霞ヶ浦沿岸を中心として」『上代文化』第36号。
11. 石岡市教育委員会 1977 『舟塚山周辺古墳群発掘調査報告書1』。
12. 石岡市教育委員会 1978 『舟塚山古墳群(10・12号墳)発掘調査報告書』。
13. 石岡市史編纂委員会 1979 『石岡市史』上巻 石岡市。
- 14・15. 筑波大学 1981 『筑波古代地域史の研究-昭和54~56年度文部省特定研究経費による調査研究報告』。
16. 和田千吉 1906 「常陸國小田村古墳調査」『考古界』6-1。
17. 谷田部の歴史編さん委員会 1975 『谷田部の歴史』谷田部町教育委員会。

18. つくば市教育委員会 1990 『羽成7号墳』.
19. 土浦市史編さん委員会 1971 『土浦市史』.
- 20・21. 土浦市教育委員会・土浦市遺跡調査会・木田余土区面画整理組合 1991 『木田余台』.
22. 土浦市教育委員会 1995 『寿行地古墳発掘調査報告書』.
23. 茨城県住宅供給会社 1975 『土浦鳥山遺跡群－土浦市鳥山住宅団地造成用地内埋蔵文化財2・3次調査報告書』.
24. 武者塚古墳調査団 1986 『武者塚古墳』新治村教育委員会.
- 25・26. 出島村遺跡調査会 1992 『富士見塚古墳群：発掘調査報告書』出島村教育委員会.
- 25・26. 国土館大学考古学研究室編 2006 『富士見塚古墳群：茨城県かすみがうら市』茨城県かすみがうら市教育委員会.
- 27～33. 茨城県教育財団 1980 『常磐自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書1』.
34. 黒沢彰哉 1992 「姪久保2号墳の調査」『婆良岐考古』第14号.
35. 庚申古墳発掘調査会・美浦村教育委員会 1989 『庚申古墳発掘調査報告書』.
36. 山武考古学研究所編 2000 『茨城県稲敷郡江戸崎町姫宮古墳群1・2号墳水神峯古墳』江戸崎町教育委員会.
37. 鉾田町教育委員会 1979 『塔宮台1号墳調査報告書』.
38. 大洋村教育委員会 1981 『梶山古墳報告書』.
39. 野中完一・坪井正五郎 1898 「常陸国互会村の古墳」『東京人類学会雑誌』第153号.
40. 茨城県教育委員会 1960 『三味塚古墳』.
- 41・42. 茨城県行方郡潮来町教育委員会 1971 『常陸大生古墳群』.
43. 茂木雅博編 1980 『常陸観音寺山古墳群の研究』.
44. 茨城県教育委員会 1970 『宮中野古墳群調査報告』.

#### 図出典

- 第1図 1 太田古墳調査団1989第6図を転載・改変  
2 茨城県行方郡潮来町教育委員会1971第8図を転載・改変  
3 国土館大学考古学研究室編2006第56図を転載・改変  
4-5 茨城大学人文学部考古学研究室編2006第13図・22図を転載・改変  
6 武者塚古墳調査団1986第11図を転載・改変

Some Notes on the late Middle and Late Kofun Period Skeletal Remains  
from Stone Coffins in “Hitachi Region”

Petra BLAJ HRIBAR

Because of the acid soil, bones in the Japanese archipelago do not preserve well. However, in the Late Kofun period the use of stone coffins, instead of wooden ones increased, and the skeletal remains from “Hitachi region” (today’s Ibaraki prefecture with the western bank of river Kinugawa included) are quite fairly preserved. Unfortunately, the comparative study between biological sex of the deceased and grave goods remains un-researched for the Late Kofun period.

In this article I presented skeletal remains from stone coffins, being discovered on the above stated area. Reports on skeletal remains are un-sufficient, with the reports stating just that some bones were recovered, and only rarely basic information on these remains is given. I was able to confirm at least 97 individuals. The most common type of burials are single and double (from late 5<sup>th</sup> to middle 7<sup>th</sup> century), while there are some cases of multiple burials (from the end of 6<sup>th</sup> to the middle of 7<sup>th</sup> century). I was also able to confirm 10 female individuals, 15 male individuals and 5 children. While there are only two cases of double burial of female and male, there are at least 4 cases of female and male buried together in a multiple burial (some of which include children).

Regarding the grave goods and their relation to the biological sex of the deceased, I should stress out that we are yet to confirm possible female goods in the Late Kofun period. However iron arrowheads (believed to be male goods) do emerge together with 14 males (though only two cases are that of a single burial). They do emerge from 10 other coffins but the biological sex of the deceased is not known. Knife as a grave good and its connection to the deceased based on its biological sex is still debated, while some refer to it as exclusively female grave good (Todoroki 1991), and others as actually occurring mostly with males as it so-occurs with iron arrowheads often (Seike 2010). I had confirmed knife with both, females and males, while knife itself emerges together with iron arrowheads on regular basis.

I believe, that in order to determine the difference (if there was one) between the status of female and male in the Late Kofun period, the presented skeletal remains would be of great use. However, to do so, DNA or at least basic anthropological analysis, which would determine the sex and age of the deceased with possible kinship connection, should be applied.